



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サマーキャンプと青年コルチャック ; 子ども集団との初めての出会い
Author(s)	大澤, 亜里
Citation	教育福祉研究, 17, 37-50
Issue Date	2011-11-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47423
Type	departmental bulletin paper
File Information	OOSAWA.pdf



サマーキャンプと青年コルチャック —子ども集団との初めての出会い—

大 澤 亜 里

0. はじめに

ヤヌシュ・コルチャック（本名ヘンリク・ゴールドシュミット、1878-1942）は、19世紀末から20世紀半ばのポーランドにおいて、作家、小児科医、教育者、社会活動家として幅広く活動し、名声を得た人物である。特に、彼が院長を務めた孤児院ドム・シエロットでの教育実践や、児童文学および教育学作品の執筆といった彼の業績は、当時も今も高く評価されている。また戦後は、子どもたちと共に絶滅収容所に送られ、悲劇的な死を遂げたホロコースト犠牲者の象徴としても注目を集めている。

日本でコルチャックの名が一般に知られるようになったのは1990年代に入ってからである。本、映画、テレビ、インターネット、演劇を通して彼の生涯が紹介され、代表的な彼の児童文学作品も日本語に翻訳された。近年では特に、国連子どもの権利条約との関係からコルチャックに関心が寄せられており、彼の子ども観や教育観、子どもの権利思想に関する研究が行われている。しかしその数は少なく、また原著に基づいて具体的に分析・検討しているものはほとんどないため、そこには未知な部分がまだまだ多い。したがって、これまで知られてこなかったコルチャックの姿を明らかにしながら、彼の子ども観や教育実践を評価することが必要であろう。

1. 本稿の課題

本稿では、コルチャックの青年時代における教育実践経験としてサマーキャンプへの参加（1904、1907、1908年）を取り上げ、そこで彼が子どもた

ちとどのように関わっていたのかを明らかにする。

コルチャックは1912年、彼が34歳の時に孤児院ドム・シエロットの院長となり、以後30年間にわたる子どもたちとの共同生活をスタートさせた。本稿で着目するのはその前段階にあたる時期で、コルチャックの大学生時代および小児科医時代におけるサマーキャンプでの教育活動である。当時彼は、家庭教師や無料図書館でのボランティアをしており、また貧困地区を訪問するなどして裕福な家庭の子どもとも貧しい家庭の子どもとも触れ合う機会があった。しかし子ども集団と関わったのはこのサマーキャンプが初めてであり、その時に子どもたちの「自主的な活動の中で教育実践のイロハを知った」（Korczak 1920: 220）と後に回想している。この言葉通り、サマーキャンプでの経験が、彼のその後の教育活動に大きな影響を与えたといえる。それ故、子ども集団を相手に初めて教育活動を行ったサマーキャンプに注目することは、彼のその後の活動を理解する上で重要であると考えられる。

青年時代にコルチャックがサマーキャンプに参加したという事実は、ほとんど全ての伝記的書物の中で言及されている¹⁾。また彼のサマーキャンプ体験記『*Moški, Joski i Srule*（モシキ、ヨスキ、スルレ）』、『*Józki, Jaški i Franki*（ユスキ、ヤシキ、フランキ）』²⁾や、当時のことを回想して書いた『*Jak kochać dziecko: Kolonie letnie*（子どもをいかに愛するか—サマーキャンプ編—）』³⁾をもとに、そこでの彼の経験を紹介したものも若干ある⁴⁾。しかし概していえば、彼のサマーキャンプでの活動は、日本のみならずポーランドにおいても

これまで積極的に研究されてこなかった領域といえよう。またそれに着目している文献もコルチャックの業績だけを問題にしているため、その背景、つまり彼が何に立脚してそのような活動を行ったのかということは見過ごされている。

コルチャックの教育実践は、当時の社会の要求や制約の中で、様々な影響を受けながら編み出されたものであることは容易に推測できる。それ故、当時の歴史具体的事実の中に彼の活動を位置づけながら、その時点でのコルチャックの到達点、つまりその時彼は子どもをどのようにとらえ、彼らとどのように関わっていたのかということを見極める必要があると考える。

こうした課題に取り組む第一歩として、本稿ではまず、サマーキャンプ事業の起源について概説し、ヨーロッパおよびポーランドではいつ、どのようにして始まったのかを明らかにする。次に、コルチャックが関わっていたワルシャワサマーキャンプ協会の取り組みやそれに対する彼の見解を示す。そして最後に、サマーキャンプでの活動の様子を具体的に紹介しながら、彼が子どもたちとどのように関わっていたのか、またそこから何を学んだのかを明らかにする。

2. サマーキャンプ事業の起源

サマーキャンプ事業とは、人口集中や工業化が進む都会の貧困層に属する子どもたちを夏、郊外に連れて行き、そこで長期間過ごさせるというものである。その目的は、彼らの健康回復と心身の発達を保障することにあった。本章ではそうしたサマーキャンプ事業がいつ、どこで、どのようにして始まったのかを明らかにする。

(1) ヨーロッパでの発足

世界で最初のサマーキャンプ事業はデンマークで起こった。1853年、コペンハーゲン市が病弱な子どもたちを田舎のホストファミリーのもとに送ったのがそのはじまりである⁵⁾ (Ziółkowska 2004)。こうしたコペンハーゲン市の取り組みを継承して、1876年には、ハンブルク市も家族キャンプを実施した⁶⁾ (Ziółkowska 2004)。同年、スイ

スのチューリッヒでは聖職者のW. ビオンがサマーキャンプを企画し、68人の貧しい子どもたちを山間部に連れて行った⁷⁾ (Ciesielska 1997: 301)。その後こうした動きはドイツに伝わり、そこで最も発展したといわれている。1878年に医師のG. ファレントラップがフランクフルトに住む97人の子どもを農村部に連れて行き、翌年の1879年にはドレスデンとシュトゥットガルトの子どもたちが、1880年にはベルリンの子どもたちがサマーキャンプに出かけた⁸⁾ (Ciesielska 1997: 301)。また、1885年にはドイツ各地の取り組みを調整する機関としてベルリンにサマーキャンプ中央事務局が設立された (Demel 1963: 320)。こうした動きはその後フランス、イギリス、デンマーク、イタリアにも伝わり、広まっていった⁹⁾。

(2) ポーランドへの伝播

ヨーロッパ諸国で展開されていたサマーキャンプ事業は、人口集中とスラム街の増大が進むワルシャワ¹⁰⁾にも伝わった¹¹⁾。特に医師や公衆衛生を専門とする人たちがサマーキャンプ活動の健康回復効果に注目した。その内の一人で、サマーキャンプの実現に大きな役割を果たしたS. マルキエヴィチは、1879年の『学校と健康について』と題する講義の中で、先述のファレントラップのキャンプ活動に言及し、そこで良い効果があったと報告した (Markiewicz 1882: 14)。マルキエヴィチは医学・公衆衛生学を学ぶためドイツに留学をしており¹²⁾ (Hanecki 1970: 120)、そこで同じ分野で活躍するファレントラップの活動に関心を寄せたと考えられる。その2年後、彼は“貧しい子どものためにキャンプがしたい”という記事を『ワルシャワ新聞』に掲載し、その考えの普及に努めた。また仲間の医師たちに声をかけ、企画作りや資金調達に奔走するなど、サマーキャンプ実現に向けて本格的に動き始めた。この医師グループが、後にコルチャックも関わることになるワルシャワサマーキャンプ協会の前身である。こうした努力が実を結び、1882年の夏、ワルシャワで初めてのサマーキャンプが実施された (Markiewicz 1882: 14-24)。この時の参加児童は8歳から13歳の子ども

も 54 人（男子 31 人、女子 23 人）で、彼らはワルシャワ郊外にある 5 か所の宿泊施設に分かれて、夏季の 4 週間、親元を離れて過ごしたのである¹³⁾ (Markiewicz 1882: 24-35)。

その後ポーランドの他の地域でもサマーキャンプが実施された。ワルシャワで初めて実施された同じ年の夏、ポズナンでも 8 日間と短期ではあるがキャンプが行われた (Ziółkowska 2004)。また 1883 年にはルヴフで、1884 年にはクラクフで同様の取り組みがなされた。(Demel 1963: 329)。ポーランドがロシア・プロイセン・オーストリアの 3 国によって分割されていた時代、サマーキャンプ事業の広まりは緩やかであったが、1918 年に独立を回復すると、政府からも積極的な支援が得られるようになり、その後の戦間期を通して著しく発展した¹⁴⁾。

3. ワルシャワサマーキャンプ協会とコルチャック

前章ではヨーロッパおよびポーランドにおけるサマーキャンプの起源を概観したが、ここではポーランドの地においてその発展の中心となったワルシャワに焦点を当て、コルチャックが数年間にわたり関与したワルシャワサマーキャンプ協会の活動について紹介する。また当時のコルチャックの執筆物を手がかりに、彼が協会の活動をどのように見ていたのかを明らかにする。

(1) ワルシャワサマーキャンプ協会の活動

1882 年にワルシャワで初めてサマーキャンプが実施された後も、主に医師たちからなる慈善グループによって、貧困層の病弱な子どものためにサマーキャンプを実施する努力が継続して行われた。1897 年、当時ワルシャワを支配していた帝政ロシア政府によって、この団体はワルシャワサマーキャンプ協会として正式に認められた。その後の活動規模の拡大および参加人数の増加は目覚ましく、1900 年以降は毎年 3000 人前後の子どもたちがこの協会のキャンプを利用するようになった¹⁵⁾。サマーキャンプ協会は、5 月半ばから 9 月半ばにかけて 4 週間にわたるキャンプを合計 4 回行

い、子どもたちを男女別・宗教別に、ワルシャワ郊外にある協会所有のキャンプ村あるいは地主から借りた宿泊施設に連れて行った¹⁶⁾。こうした取り組みのおかげで、多くの貧しい家庭の子どもたちが、夏に一大イベントを経験することができたのである。

ワルシャワサマーキャンプ協会の目的は、帝政ロシア政府によって承認された協会定款によると、「ワルシャワ市の貧困層に属する病弱な子どもの健康改善の世話をすること」にあり、それは「郊外あるいは治療効果のある適切な場所で夏の一か月間、新鮮な空気を享受できるようにすることを通して」実現するとしている (Ciesielska 1997: 303)。この目的達成のために適切な場所を確保すること、貧困層に属する病弱な子どもを選考すること、健康改善の世話をする人を確保することが協会の課題であった。

適切な場所を確保するために協会は以下のことを考慮しながらキャンプ村の選定を入念に行った；近隣の樹木の多さ、飲料水の質、下水処理設備、水道水による入浴の可能性、鉄道までの距離、大都市から離れていること、教会・医者・薬局までの距離、良質な製品の購入しやすさ、健康的な気候、建物の広さなどである (Ciesielska 1997: 308)。ここから、治療効果だけでなく生活する上での快適さや便宜性も考慮されていたことがわかる。

サマーキャンプへの参加希望者数は参加可能人数に対して非常に多かったため、協会は応募者の子どもの健康状態や家庭状況を事前に調査し、その結果をもとに参加者を選考した¹⁷⁾。健康診断はキャンプから帰ってきた後にも行われ、その膨大な調査の結果、つまりキャンプの前と後での子どもの変化（身長や体重の増減など）は、毎年刊行されるサマーキャンプ協会の年間活動報告書に記載された (Ciesielska 1997: 304)。毎年 3000 人以上の子どもが選考からみれるなど、実際にキャンプに参加できたのは希望する子どもの半数以下であった。しかし、健康診断や家庭調査など貧困層の子どもに関する大規模な体系的調査を行ったこ

とは、当時において画期的な試みであったといえよう¹⁸⁾。

このようにサマーキャンプ協会は、貧困層にある子どもの健康を保障するためにキャンプ村周辺の環境に細心の注意を払い、また子どもの実態を徹底的に調査した。しかしそれら以上に協会が重視したことは、キャンプ期間中子どもたちと生活を共にする指導員の役目であった。キャンプには家事手伝いと30人の子どもグループを担当する指導員数名が同行したが¹⁹⁾、特に指導員に対してはサマーキャンプが初めて実施された当初から高い期待が寄せられていた。そのことは1882年の活動報告書にある次の文章からも明らかである。「サマーキャンプが順調に発展していくかどうかは、指導員が自身に課された任務を遂行するかどうか、またどのように遂行するかにかかっているであろうということを私たちは予感していた」(Markiewicz 1882: 35)。

指導員に課された任務とは一体何だったのだろうか。初めてサマーキャンプが行われた年(1882年)から、協会は指導員に対して“手引書”を作成しており、そこに指導員の任務を詳細に記した²⁰⁾。この“手引書”を参考にしながら、キャンプ村での一日の流れ、指導員が念頭に置いておかなければならない3つの原則、その原則を守るための具体的任務を紹介する²¹⁾。

1) キャンプ村の一日

キャンプ期間中、子どもたちは毎朝午前6時に起床する。支給された服に着替え、顔を洗い終えたら集合し、新鮮な空気を浴びながら皆で祈禱を唱える。それが終わると宿舎の清掃をし、午前7時には提供される朝食までベランダや庭に腰を下ろし、新鮮な外気に当たって過ごす。朝食を食べてから正午の昼食までは自由時間である。昼食後、小休憩をはさんで午後2時からは課業の時間²²⁾に充てられていた。午後4時におやつが支給され、その後は午後8時の夕食まで自由に過ごす。夕食後には夕刻の礼拝が行われ、それが終わると子どもたちは床に就いた。天候と道のりさえ許せば、日曜・祝日は教会に出かけた(Markiewicz 1882:

69-70)。

2) 指導員の3原則

指導員が特に心得ておかなければならない原則が3つあり、それは以下のことであるという。「1. サマーキャンプの課題は、何よりもまず都市に住む病弱な子どもの身体に栄養を与えることである。それは新鮮な空気、適度な運動、しかるべき食事を通して、またできる限り清潔に保つことを通して、そしてついには、キャンプに参加するそれぞれの子どもに対して出された医師の指示にきちんと従うことを通して遂行される。2. 子どもが敬虔な態度で規則正しく振舞うようにさせなければならない、行儀の悪い遊びや言い方はどんなものであれ許してはいけない、また子どもの精神や体に不名誉をもたらすようなあらゆる悪習を厳しく監視しなければならない。3. そして最後にこれまで田舎暮らしの楽しみや自然の美しさとは全く無縁の世界にいた街の子どもたちの知性を、神の賢明な摂理がこの上なく素晴らしく現れている生き物の細部全てに向けさせ、また田舎の農場で働くことで、田舎および都会に住む人たちのために、人間が自然の生命から得ているあらゆる利益に向けさせなければならない」(Markiewicz 1882: 67-68)。

3) 具体的任務

この“手引書”には、上記の3原則を遂行するための具体的任務も挙げられている。1. の健康増進という原則に関しては、外で一緒に遊ぶ、病気や怪我・事故を避け、身体に悪い影響を及ぼす可能性のある全てのものから子どもの身を守る、食事が清潔で美味しく調理されているかを監督するといった任務が、2. の規律正しさの原則に関しては、反抗的な子どもや他人に迷惑をかける子どもには厳しく注意し、それでもきかない場合は罰を与えたり親の元に返したりするようにと、3. の興味・関心を引き出すということに関しては、自然や田舎の人々の営みに触れさせたり、読み・書き・お話といった知的活動を行ったりするという任務が記されている(Markiewicz 1882: 69-72)。

以上から明らかなように、指導員にはキャンプ期間中の子どもの健康状態、食事や運動といった意味での生活習慣、規律正しさや行儀の良さといった生活態度、自然に対する興味・関心など、子どもの生活の広範に渡って注意を払うことが求められていた。

貧しい人たちをタダ同然で診察・治療するという医師たちの慈善的活動は19世紀の半ば頃から行われており（Hanecki 1970: 121-126; Podgórska 1970: 145）、こうした医師たちの社会活動の一つともいえるワルシャワサマーキャンプ協会の活動が、健康の回復・増進や発達の保障を主たる目的としていたことは容易に理解できる。しかしこうした医療・衛生活動にとどまらず、生活態度を身につけることや知性を発達させることを意図するなど、教育的活動も積極的に行っていたことがここからわかる。

世紀転換期、ワルシャワでは増大する貧困層家庭の子どもや孤児・浮浪児を対象とした社会事業が展開しており、このサマーキャンプ活動もそうした子ども保護事業の内のひとつであった。数多くある社会事業の中でコルチャックがこのサマーキャンプに関心を寄せたその決定的理由はまだ定かでない。しかし、医学部生時代からこの活動に注目していたことは彼の当時の記述から明らかである。次節ではそうした記述を引用しながら、コルチャックがサマーキャンプ協회를どのように評価していたのかをみていく。

（2）コルチャックの協会に対する評価と期待

サマーキャンプがポーランドに伝わり、その活動がワルシャワで具体的に興り始めた時、コルチャックはワルシャワ大学医学部の学生であった。医療および公衆衛生に携わる先輩たちのこうした活動に刺激を受けて、彼自身もそれに関与するようになったと推測できる。では彼は一体サマーキャンプ活動をどのように評価していたのだろうか。

コルチャックがワルシャワサマーキャンプ協会に加盟したのは1900年（Falkowska 1989: 63）、つまり彼が大学2年生の時であった。以降1915年

まで一般会員として籍を置くことになるが、この加盟以前から彼は協会の活動に一目置いており、自身の執筆作品の中でも何度か言及している。例えば、この協会が正式に認可された翌年の1898年、コルチャックが20歳の時には、「ワルシャワでは今日3000人近くの子どもたちがこの機関のサービスを利用している。3000人近くもの子どもが！（活動を始めてからまだ；筆者補足）15年も経っていないのになんて進歩だ！（中略）いつの日かサマーキャンプが病院や保護所²³⁾を不要なものにする日が、矯正施設にとって代わる日が来ることだろう」（Korczak 1898: 10-11）と述べ、協会によるキャンプ事業の目覚ましい進展に対する驚嘆と、それが子どもの一時的養護を担い、また病気や非行の予防・回復・改善につながるであろうという期待をあらわにしている。またその翌年には、サマーキャンプ協会を「神聖な機関」と称し、貧困層にある多くの子どもに「きれいな空気と健康的な食事、新鮮な感覚と誠実な保護を保障している」（Korczak 1899: 120-122）と、その活動を高く評価する。その一方で、「病弱な子ども、生気のない子ども、何かの病気の原因を抱えている可能性がある子ども、神経質な子ども」など、依然としてこうした機会を利用できないでいる子どもが多数いることを指摘し、その限界を嘆いてもいる（Korczak 1899: 120-122）。

こうしたサマーキャンプ協会に対するコルチャックの期待や不満足は、協会加盟後に書かれた文章にもあらわれている。例えば次のような記述がある。「（ワルシャワサマーキャンプ協会の；筆者補足）会員数は数百名にのぼる一数千人でないのが残念だ、（中略）田舎滞在に送られる子どもの数は3000人を超えている。これはかなりの数であるが、同時に少ないともいえる。かなりの数というのは、委員会が自分たちの持っている力、資金以上に働いているからである。少ないというのは、ワルシャワの街路には1万人もの子どもたちがおり、そのうちのわずか一握りの子どもたちしか行けていないからである」（Korczak 1901: 353-354）。

サマーキャンプ協会の活動規模に不十分さを感じながらも、その価値を認めるコルチャックは、こうした活動が一時の流行で終わってしまわないようにと風刺記事の中で訴える (Korczak 1902: 116)。また、「公衆衛生協会の会員でありながら、サマーキャンプ協会の会員でない人物」や「医師でありながらサマーキャンプ協会の会員でない人物」を批判するなど (Korczak 1904a: 22-25)、医師および公衆衛生に携わる人物はこうした活動に積極的に取り組むべきだと考えていたことがわかる。

以上のようにサマーキャンプ協会の取り組みを評価するコルチャックは、自らもそれに身を投じていくことになった。そしてキャンプに実際に参加し、ますますそれに魅了されていったようである。参加に至るまでの経緯に関する詳細な分析は今後の課題として残っているが、次節ではコルチャックがそこでどのような経験をしたのかを具体的にみていく。

4. 青年コルチャックの実践の試み

コルチャックが指導員として初めてサマーキャンプに参加したのは1904年のことで、当時まだ医学部の学生だった彼は、後の勤務先となるベルソン・バウマン小児病院の外来診療所で助手をしていた²⁴⁾。その年の夏は2期にわたってユダヤ系の少年たちと共にキャンプ村ミハウフカにでかけた。その後1907年にもユダヤ系少年を対象にしたキャンプに参加、その翌年にはキャンプ村ヴィルヘルムフカで実施されているカトリック系少年たちのためのキャンプにも参加した。

冒頭にも書いたように、コルチャックが子ども集団と出会い、その中で教育活動を行ったのはこのサマーキャンプが初めてであった。そして、このキャンプ参加後に彼は孤児院ドム・シエロット設立に向けて精力的に動き始めることになる。そこでこの章では、サマーキャンプにおけるコルチャックの実践の試みを具体的にみていきながら、子ども集団との出会いを通して彼が経験したことや学んだことを明らかにする。

(1) 子ども観察とその記録の重要性

初めてキャンプに参加した時の初日の就寝時間の様子を、コルチャックは次のように記している。

「4列に並んだベッド、38人がそれぞれの部屋に入る。時刻は午後8時半。ついさっきまで騒々しかった—今はとところどころで小さなささやき声が聞こえるだけ。(中略)もう一瞬、あと数人—静寂、寝ている。ある子どもたちは掛け布団を頭まで被っている、起こさないように気をつけながら私はその覆いを剥がす—初めて参加する子どもの極度の不安、眠ったまま口を開け、深く空気を吸い込み、何かブツブツ言っている—そして心もとなくゆらゆらと手を動かす—寝ている、頭はもう掛け布団で包まれていない。(中略)数人の子が帽子を被ったまま寝ている。私はそれを脱がせながらその子どもの名前をノートにつける。(協会の事務所の；筆者補足)庭で最初のペアが編成された時から、私は全てを記録している、耳がきれいなのは誰か、頭にシラミがいるのは誰か、事務所あるいは駅に遅刻してきたのは誰か、1人で駅までやってきたのは誰か、母親からキャラメルやジンジャークッキーを道中のおやつにもらえなかったのは誰か、前掛けあるいはスモックを身につけているのは誰か—誰が初めてで、誰が2回目の参加か、禁止されているにも関わらず、車両の窓から身を乗り出しているのは、文句を言っているのは、ペアの子の手を振り切って逃げ出したのは誰か。(後略)」(Korczak 1904b: 242)。

コルチャックは子どもが朝起きてから夜寝るまで、そして眠りについてからも彼らの様子を観察し、それをノートに記録した。そうすることでその子どもの「生活環境や家族、そしてついにはその子自身を診断」(Korczak 1904b: 242-243)することができ、また子どもと知り合いになることができると考えていたようである。このようにコルチャックは子どもを観察し、記録をとることをとても重要視していた。こうした姿勢はその後も持ち続けることになる。

(2) 子どもに教わるということ

指導員のための「手引書」には天気の良い日に

は本を読んだり、お話を聞かせたりして過ごすようにと書かれていた。しかしコルチャックは、天候に関わらず子どもたちに色んなお話をして聞かせ、また子どもたち自身がお話をする機会もつくっていた。ここで紹介するのは、こうしたコルチャックの物語りに関する場面の一つである。

「(前略) “子どもたちよ、こっちにおいで、とても面白いお話をしてあげよう” と、ある時一人の指導員(コルチャック自身のこと、以下も同様；筆者補足)が言った。おそらく100人ほどいる男の子たちの中から、たくさんの子どもの面白いお話を聞くために走ってきた。“ここに座ろうぜ”と一人の男の子が提案する。“いや、森の先へ行こう”と指導員が決める、彼はこれほどたくさんの男の子たちがお話を聞くために走ってやってきたことを誇らしく思っているのだ。そして森の外れまでたどり着くと、男の子たちはそこに大きな半円を描いて座った。“押し合うんじゃない、全員が聞こえるように大きな声で話すから”と指導員が言う、最も良く聞こえるように一番近くに座ろうとして、押し合ったり言い合ったりしていた男の子たちは満足した。“よろしい、静かに一では始めるよ。ある時…”。その時、(中略)プロンベルグが、(中略) “あ、あそこ、羊が歩いている”と知らせた。事実、羊の群れが追い立てられていた。羊たちはもうもうとした砂埃の中を、乱雑にひしめき合いながら歩いていた、それはこっけいで、また仰天するようなあり様だった。男の子たちは(中略)面白いお話のことなど忘れて飛び立ち、羊を見に走り出した。指導員は一人残された。確かに、しばらくの間、彼はそれを少し不愉快に感じていた。だがその時から彼は面白いお話をするという自分の才能をあまり信じなくなり、そのおかげで以前より謙虚に、つまりより賢明になった。羊は彼に分別を教えたのだ」(Korczak 1910: 63-63)。

この経験を通してコルチャックは、「指導員は子どもたちを教育し、子どもたちは指導員を教育する」(Korczak 1910: 63)ということを学んだ。子どもたちの言葉や行動から気づき、学ぶというサマーキャンプでの経験が、後に明確となる “子

もによる教育者の教育” という彼の考えにつながっていったと考えられる。

(3) 過ちを認める勇氣とそれを許すこと

—“キャンプ裁判”²⁵⁾を通して—

“キャンプ裁判”には3人の裁判官があり、週に一度行われる投票によって、子どもたち自らが選出した。裁判は森の中もしくはベランダで行われ、裁判官は机の前に、被告と証人は長椅子に座り、傍聴人はその後ろに立った。指導員は、検察官・原告または弁護士・擁護者として裁判に参加すると同時に、訴訟内容を記録する役割も担った。それぞれの証言が終わると裁判官たちによる審議が行われ、判決が下される(Korczak 1910: 21-22)。

では具体的にどのような裁判が行われたのだろうか。1907年のキャンプ中に行われた裁判についてコルチャックは次のように記している。「1シーズン通して43件の訴訟があった。(その内の；筆者補足)19件は私が起訴した：3人の男の子をキャンプ村の外に勝手に出て行った件で、3人を夜、部屋で騒いだ件で、5人を気違いのユダヤ人に砂や松ぼっくりを浴びせかけた件で、1人を窓ガラスを割った件で、4人を汚い水を飲んだ件で、1人をウソの証言をした件で、1人を当番を怠けた件で、1人を花をテーブルから投げ落とした件で訴えた。(残りの；筆者補足)24件の訴訟は子どもから出されたもので、その内16件は両者の和解によって決着がついた」(Korczak 1907: 290)。

以上から明らかなように、裁判にはある子どもがある子どもを訴える場合と互いに訴え合う場合、そして指導員が子どもを訴える場合とがあった。大半は両者の和解や謝罪によって解決に至るか、あるいは無罪判決が下されたが、中には有罪判決を受け、“監禁”や“ひざつき”²⁶⁾などの罰が科されることもあった²⁷⁾。また、コルチャックの「私は1件について控訴した、というのも、顔のきくある男が少年を罪もなく打ち、それが無罪となったからである」(Korczak 1907: 290)という記述が示しているように、判決に対して不服がある場合には控訴することもできた²⁸⁾。

次に裁判がどのように行われたのかを見てい

く。ここでは2人の男の子がキャンプ村の遙か遠くの野原まで行き、鐘が聞こえずに朝食に遅刻した件で指導員が子どもを訴えた時の裁判の様子を紹介する。

「『キャンプ村の森の彼方まで出掛けてはいけない』ということをあなたたちは知らなかったのですか。なぜなら道に迷うかもしれないし、川で溺れるかもしれないし、牛が角で当たってくるかもしれないし、犬がかみつくかもしれないからです。朝食後に私たちは泳ぎに行かなければならないため、朝ご飯に遅れてはいけないということを知らなかったのですか。何をしに森の彼方まで行ったのですか、いつからここが遊び場としてうんざりするものになったのですか”。**ピヴァック**と**シドウォフスキ**（被告の男の子2人；筆者補足）は花を摘みに行ったのだ。「裁判官！この少年たちは間違いなく悪いことをしました。朝ご飯にも、昼ご飯にも、おやつにも、夕ご飯にも遅れてはいけません、100人が1人あるいは2人を待つなんてことはできません。森でそれぞれを別々に探し出し、鼻を引っ張ってテーブルまで連れてくることもできません。だから鐘があるのです。そしてその鐘に注意していなければならないのです。したがって、彼らを罰しなければなりません、しかしながら…**ピヴァック**と**シドウォフスキ**は花を摘みにキャンプ村の森の彼方まで行ったのです。田舎では花を摘んでもかまいません。それは食べることを忘れてしまうほどに彼らを喜ばせたのです。**ピヴァック**は初めてキャンプに参加しています、**シドウォフスキ**は**チエホチネク**のキャンプに参加しましたが、そこには花はほとんどありません。だから彼らのこの初めての出来事を許すことはできないでしょうか”。裁判官たちは短い話し合いの後、2人の被告を無罪にした」（Korczak 1910: 24）。

もう一つ、指導員が子どもに対して行った裁判について紹介する。普通裁判官になるのは子どもであったが、唯一**コルチャック**が“最大の違反行為”と呼んだ、子どもたちだけで川に泳ぎに行った件については指導員が裁判を行った。その裁判

の判決に従い、指導員はこの違反行為を告げる手紙を両親宛てに書いたが、今後二度と自分たちだけで泳ぎに行かないならば、その手紙は送らないと子どもたちに約束した。その掟を守り抜いた少年たちの姿から、**コルチャック**は子どもの内に「過失を認める勇気」と誘惑に負けない「不屈の精神」があるということに気づいたという（Korczak 1911: 131-132）。

“キャンプ裁判”を行う子どもたちの様子を観察して、**コルチャック**は彼らが「許し、そして誠実に、私心なく一心に自分の任務を果たせる」（Korczak 1907: 290）ことに気づくなど、子どもの中にある様々な可能性を見出していった。また“キャンプ裁判”の試みを通して、「150人の少年がいるところでは、毎日30の言い争いと5の乱闘が起こる。論争や殴り合いが起こるところには、裁判がなければならぬ」（Korczak 1910: 21）とその必要性を確信すると同時に、その裁判は“公正”でなければならず、また“信望と信頼”を得なければならないということを理解した。後に孤児院**ドム・シエロツ**でも子どもによる“仲間裁判”が行われるが、その際サマーキャンプでのこうした経験が多大な影響を与えたと推測できる。

（4）“係仕事”のプラス面とマイナス面

150人の子どもたちが一緒に生活するキャンプでは、子どもたち自らが布団を敷いたり、食事を配ったりしなければならぬ。しかし中にはまだ一人でできない子どももいるため、布団を敷く係や食事を配る係があった。その他にも、部屋の秩序を監督する係、飲み物を配る係、タオルがきちんとかかっているか点検する係、針や糸などを貸し出す裁縫係などがあった（Korczak 1910: 26, 1911: 176, 1904b: 272）。

コルチャックは“係仕事”について、「子どもが、彼らにとってあまり負担とならないようなある任務を引き受けることには良い面があるだろう」と指摘する。しかし係の者が「その仕事に特有のある特権を利用しない限りにおいて」という制限をつけた（Korczak 1904b: 272）。というのも、飲み物係が「自分にとってどうでもいい子どもや喉が

渴いている子どもよりも、親友により速く飲み物を与え」たり、食事係がよりきれいな食器や料理が多く盛られた皿を親友に配っている場面をししばしば観察したからである (Korczak 1904b: 272)。

コルチャックは“係仕事”の取り組みを通して、そのマイナス面、つまり係の者がその仕事に特有の権力を行使したり、その人の意見は他の人の意見よりも大きな価値があるという感覚に陥ったりするということに気付いた。それ故、この制度を廃止すべきか、それとも監視すべきかと当時悩んだ (Korczak 1911: 176, 1904b: 272)。しかし後の孤児院では設立当初からこの“係仕事”を取り入れることになる。このことは、サマーキャンプでの集団生活を通して、彼が“教育実践のイロハ”を学び、マイナス面を克服する術を見つけたからだと考えられる。

(5) 子どもが教える子どもの姿

—“好感度評価”を通して—

コルチャックは、ある女学校に仲間や教師に対する好感度を示す習慣があるということを聞きつけ、それがキャンプに参加している男の子たちにも役に立つだろうと考えた。“好感度評価”は“とても好感のもてる人”を5、“好感のもてる人”を4、“どちらでもない人”を3、“少し嫌な人”を2、“嫌な人”を1として、仲間を評価するというものである。これをキャンプで試みたコルチャックは以下のように感想を記している。

「日に日に5の数が増えていった。当初、嫌な人あるいはどちらでもない人は、すぐに好感のもてる人やとても好感のもてる人に移った。そして、最も好感がもてると評価された人というのは、一週間、名簿に“?”マークがついていた人たちであろうということを私は確信した。たくさんの人たちの中からやっとの思いで彼らを見つけ出し、捉えなければならなかった。おとなしいものは脇に放っておかれていた」(Korczak 1904b: 275)。

コルチャックは“好感度評価”を通して、指導員の眼中になかなか入らない大人しい子どもが皆から好かれていることに気付くなど、子どもたちが見る子どもの姿を教えてくれるということを経験した。

んだ。おそらくこのような意義を“好感度評価”に見出したからであろうが、これは後に孤児院でも取り組まれることになる。

サマーキャンプ中、コルチャックは子どもたちが頭や顔や体をきちんと洗っているか、部屋は整理整頓されているか点検するなど、衛生面に配慮することを怠らなかった。また川で泳いだり、体を動かして遊んだりして、健康な身体づくりにも気を配った。その他にも森や野原に出かけて自然に触れさせ、お話をして聞かせるなど、“指導員のための手引き”に忠実に従って子どもたちと過ごした。しかしコルチャックはその枠にとどまることなく、ここに紹介したエピソードに登場しているような様々な実践を試みた²⁹⁾。

こうしたサマーキャンプでの試みは、その後改善され深められて、孤児院の教育実践の中で再び現れることになる。それらに関してここでは詳しく触れないが、サマーキャンプでの実践の試みがその後のコルチャックの教育活動に影響を与えたといえるだろう。また長期にわたる子どもたちとの田舎生活を通して、コルチャックはこれまで知らなかった子どもの世界や彼らの力を見たが、その中でも特に、子ども社会との出会いが彼にとって画期的な出来事であったといえよう。その時の印象をコルチャックは次のように記している。「(子どもたちは)バラバラの集団から、協力や互いの譲歩、協同作業、そしてまともな意見が必要であるということを理解する社会へと作り変えた」(Korczak 1907: 290)。このような子ども社会を念頭においた取り組みが後の孤児院で多く展開されることになる。

5. おわりに

サマーキャンプに参加した数年後、コルチャックは次のように述べている。

「貧しい家庭の子どものためのサマーキャンプ。太陽、森、川。子どもたちは歓喜と礼儀と思いやりを吸収する。昨日は小さな野蛮人、今日は愛らしい遊びの参加者。自信がなくおどおどして、臆病で、鈍い子が、一週間後には勇敢で、活気があ

り、自発性と歌声に満ちている。こちらでは時々刻々と変化し、あちらでは週ごとに変化する、(後略)」(Korczak 1918: 57-58)。

このように自然に囲まれた田舎生活を高く評価していたコルチャックは、ドム・シエロット設立後もサマーキャンプ実施に向けて努力した。1921年に孤児院所有のキャンプ村がゴツワヴェクにつくられると³⁰⁾、それ以降、第二次世界大戦が勃発した翌年、つまり1940年の夏までコルチャックは毎年子どもたちとともにそのキャンプ村に出かけたのである。青年時代に彼を魅了したサマーキャンプは、その後もずっと彼をとらえ続けたのだった。

注

- 1) 翻訳本も含め、日本語で出版刊行されている伝記的書物として、主に以下のものがあげられる：ベティ・J・リフトン (1991) 『子どもたちの王様 コルチャック物語』サイマル出版会；モニカ・ペルツ (1994) 『私だけ助かるわけにはいかない コルチャック』ぽるぷ出版；近藤康子 (1995) 『コルチャック先生』岩波ジュニア新書；近藤二郎 (2005) 『決定版 コルチャック先生』平凡社ライブラリー、他。
- 2) ユダヤ系の少年のためのキャンプ村ミハウフカでの体験記『*Moški, Joski i Srule* (モシキ、ヨスキ、スルレ)』は、児童向け雑誌“Promyk (プロミク)”で連載され (1909 年)、その後 1910 年に単行本となって出版された。カトリック系の少年のためのキャンプ村ヴィルヘルムフカでの体験記『*Józki, Jaški i Franki* (ユスキ、ヤシキ、フランキ)』も前者同様、1909-1910 年にわたって雑誌“Promyk”で連載、1911 年に本となって出版された。これらの作品にはコルチャックがサマーキャンプで観察した子どもたちの姿が描かれている。
- 3) 『*Jak kochać dziecko: Kolonie letnie* (子どもをいかに愛するか—サマーキャンプ編—)』は、当時のサマーキャンプを回想して書かれたもので、1920 年にその他のシリーズ (家庭の子ども編、寄宿寮編、ドム・シエロット編) とともに出版された。
- 4) 例えば、日本の論文では塚本智宏 (2009) 「コルチャックの教育実践と子どもの権利 (その一) —子どもの要求する権利—」『子どものしあわせ』11、44-47 がある。またポーランド語の論文では Jundziłł, E. (2006) *Opieka nad dzieckiem na koloniach letnich Janusza Korczaka* (ヤヌシュ・コルチャックのサマーキャンプにおける子ども保護)、所収: *Pedagogika Janusza Korczaka: realizm czy utopia?*, WSHE we Włocławku, 95-103 がある。
- 5) 当時デンマークとプロイセンとの間で二度にわたるシュレースヴィヒ・ホルシュタイン戦争が行われた (一次は 1848 年から 1852 年、二次は 1864 年)。コペンハーゲン市のサマーキャンプ実施が第一次戦争終結の翌年にあたることから、この取り組みが戦後の子ども保護政策の一環であったとも考えられる。その 4 年後、デンマークのサマーキャンプ事業数は 700 に達したという (Ziółkowska 2004)。
- 6) コペンハーゲンとハンブルクのキャンプ活動は市の行政機関が行ったものと思われるが、その主導者など詳細は不明である。
- 7) 一般に、W.ピオンが先駆者として知られており、世界教育事典には「ピオン、チューリッヒ小学校生徒中下層社会の病弱児童に対しはじめて休暇聚落組合を作り 3 週間転地させ良好な成績をおさめる (スイス)」とある (平塚 1972: 611)。
- 8) これらドイツでの取り組みが、誰あるいはどの機関によって行われたのかは不明である。
- 9) Ziółkowska (2004) によれば、19 世紀の後半にヨーロッパ各地で始まり展開していったサマーキャンプについて、当時の公衆衛生に関するジュネーブ条約 (1883 年) は「(前略) 貧しく病弱な子どもたちが、風通しの悪い住宅から離れ、林間もしくは臨海で指導員による専門的なケアのもと、しばらくの間過ごすことを可能にする。彼らに栄養のある食事を与え、出来る限り多くの時間を屋外で過ごせるようにしなければならない。そうすれば、病弱な子どもたちは生き生きと元気になり、都市生活の有害な影響を受けないようになるだろう」と、その意義を唱えたという (Ziółkowska 2004)。
- 10) 塚本 (2011) は、19 世紀末、工業化と都市化を背景にしてワルシャワの人口が急激に増加したこと

を示している（1882年—382,964人、1897年—624,189人）。そしてこの人口集中や、それに伴う労働場所の不足が貧民街を増大させ、そこにたむろする孤児が増加していったと記している（塚本 2011：42）。

- 11) 当時の著名作家 B.ブルスがヨーロッパでのこうした動きにより早く興味を示し、1876年には自身の年代記の中でこの問題を取り上げた（Demel 1963: 320）。社会活動家としても活躍していた彼は、その後のサマーキャンプ事業の運営面でも精力的に支援した。
- 12) マルキエヴィチはワルシャワで医学部と薬学部のための外科医療大学、またその後身である中央学校で学んだ後、それを補うためにヴェルツブルクとウィーンとプラハに留学した（Hanecki 1970: 120）。前述のファレントラップもまたヴェルツブルクで医学を学んだ。マルキエヴィチは1879年にワルシャワに戻ると、中等学校の学校医および鉄道医として働く傍ら、公衆衛生協会や子ども保護協会などに加盟、社会活動家としても活躍する。
- 13) 数名の地主から滞在施設提供の申し出があったが、協会はそれぞれの場所の環境などを吟味して、その中から5つの場所を選んだ（Markiewicz 1882: 24-28）。子どもと引率の指導員は7月1、3、4日にそれぞれの場所に向けて出発した（Markiewicz 1882: 42）。
- 14) 当時のポーランドの教育百科事典には、ポーランド全体におけるサマーキャンプ利用者が1923年には20000人、1937年には400000人と大幅に増加したと記されている（Łempicki 1937: 554）。
- 15) サマーキャンプへの参加人数の変遷は以下の通りである：1882年—54人、1883年—84人、1884年—136人、1885-1889年—200~300人、1890-1892年—400~500人、1893年—884人、1894年—1368人、1895年—1821人、1896年—1961人、1897-1900年—2000~3000人、1901年以降—3000人前後（Ciesielska 1997: 303）。
- 16) 協会が所有・管理するキャンプ村3つのうち、ヴィルヘルムフカ（1901年建設）はカトリック系の男子（1904年までは女子）が、ゾフィウフカ（1901

年建設）はカトリック系の女子（1904年までは男子）が、ミハウフカ（1902年建設）はユダヤ系の子どものためのもので、前半2期は女子が、後半2期は男子が利用した。これら3つのキャンプ村には1シーズン通してそれぞれ約600人の子どもが訪れた（1回につき約150人）。その他にも地主から借りて利用していた宿泊施設が10ヶ所ほどあった。地主は資金援助もしくは現物支給をするなどして、その運営に関わった（Ciesielska 1997: 308, 312）。1904年度の協会の活動報告書によると、参加者3001人の内、781人がユダヤ系の子どもであった（Ciesielska 1997: 371）。

- 17) 例えばコルチャックがサマーキャンプに参加した年についていえば、1904年は6726人が申し込みをし、5399人が適性検査を受け、3001人がキャンプに参加、1907年は8066人が申し込みをし、5761人が適性検査を受け、2742人がキャンプに参加、1908年は6679人が申し込みをし、5392人が適性検査を受け、2920人がキャンプに参加した（Ciesielska 1997: 304）。
- 18) 1880年代からポーランドでは W. ダヴィドや A. シツヴナらによって実証的な子ども研究が体系的に行われ始めた。こうした背景の中で、サマーキャンプ協会は特に貧困層の子どもに焦点を当てて実態調査を行った。
- 19) 報酬として指導員には25ルーブル、家事手伝いには30ルーブルが支払われた（Ciesielska 1997: 307）。
- 20) その後、指導員のみならず両親、家事手伝い、監査官、食堂経営者のための指示書も作られた（Ciesielska 1997: 305）。
- 21) ここでは1882年度の活動報告書を参考にする。その後、指導員に課せられた任務の内容に多少の広がりや深まりはあったであろうが、サマーキャンプ事業開始から25周年を記念して Łazarowicz（1907）が執筆した活動報告書にも同様の記述があることから、その方針は大きく変わらなかったと考えられる。
- 22) 学科の勉強が行われていたという記述は見当たらないため、この時間は読書や物語り、散歩や川泳

ぎといったグループ活動に充てられていたと考えられる。

23) 保護所とは、貧困層家庭の3歳から7歳までの子どもを日中預かる施設である。そこで子どもたちは遊んだり、体操をしたり、祈祷や歌の勉強をしたり、手作業をしたり、読み書きの初歩を学んだりして過ごした。

24) コルチャックがキャンプに参加したきっかけについて、一説では、指導員に対する高い要求に応えるべく素質ある若者を協会員自らが探しており、ベルソン・パウマン小児病院の医師でサマーキャンプ協会の積極的な活動家であるJ.クラムシュティクが、助手をしていたコルチャックに影響を与えたのではないかとされている (Ciesielska 1997: 307)。

25) サマーキャンプ協会の刊行物には、何か特別なことが起こった場合に職員によって行われた“緊急”裁判のこじか触れられていないため、子どもによる“キャンプ裁判”はおそらくコルチャックが取り入れたのではないかとされている (Ciesielska 1997: 360)。

26) “監禁”とは狭い空間に何分間か閉じ込められる罰のことを、“ひざつき”は膝を地につけたまま何分間か静止する罰のことを意味すると考えられる。

27) 有罪判決が下された訴訟について、いくつか紹介する。参考文献は、『Janusz Korczak Dzieła tom 5』で、カッコ内には掲載頁を記す。

①ある子どもがある子どもを訴えた例：Fの投げた石がOに当たり、Oが泣いた件について、裁判官はFがまだ年少であることを考慮して、10分間の“監禁”を命じた (22)；3人の男の子が鳥の巣を壊した件について、これが初めてであったこと、悪気はなかったこと、正直に全て話したことを考慮して、内1人を許し、残りの2人にはその日の夕食を皆とは別々にとるよう命じた (129-130)；Wが蛙を苦しめたあげく殺した件について、授業中に画像で見た蛙の心臓を実際に見たかったというWの興味、キャンプへの参加は初めてであり、動物を苦しめることが禁じられているとは知らなかったことを考慮して、10分間の“ひざつき”を命じた (130)；Zが2匹の蛙を殺した

件について、理由もなくやったので、20分間の“ひざつき”を命じた (131)。

②子どもが互いに訴え合った裁判の中で特に多いのは、相手を不快な気分させるあだ名で呼ぶことに関するものであった (132, 135) が、次のようなケンカもあった：朝、布団を畳んでいる時に起こったケンカについて、どちらから吹っ掛けたのか証明できる人がいず、両者とも譲らないため、仲直りすることを提案した (23)；殴り合いのケンカについて、両者は仲直りをして決着つけることを望んだが、血が出て、あざが残るほどの傷を負ったため、15分間の“監禁”を命じた (23-24)。

③指導員が子どもを訴えた例：就寝時間に吠えたり、口笛を吹いたり、手を叩いたりして騒いだ件について、誰がやったか尋ねたところ、2人の男の子だけが白状し、その他の子どもたちは黙ったままだった。そこでこの2人を特別に罰するのではなく、グループ全員を有罪とし、その日のおやすみのバイオリンを禁じた (27-28)；ラッパが鳴っても森から帰って来ず、いつも遅刻するSに対して、20分間の“ひざつき”が命じられた (131)。

28) 控訴裁判はそれぞれのグループから1人ずつ選出された5人の裁判官で構成された (Korczak 1907: 290)。

29) 子ども“裁判”、“係仕事”、“好感度評価”の他、日記をつける習慣や新聞の発行といった試みもなされた。日記をつけたい人にはノートを支給しようと提案した時、多くの子どもたちが興味を示し名乗り出たが、ほとんどの子どもが長続きしなかったという失敗談がコルチャックの作品の中に描かれている (Korczak 1911: 109-115)。また、サマーキャンプ新聞に掲載されたニュースや記事も紹介されている (Korczak 1910: 47-49)。

30) 孤児院ドム・シエロットの設立母体である孤児救済協会に、M. コーンがゴツワヴェク (地名) にある土地と建物を寄付したことで、そこにキャンプ村ルジチュカがつくられた。ドム・シエロットの子どものみならず、ワルシャワにある他の様々な児童施設の子どもたちも毎年このキャンプ村を利用した。

参考文献

- Ciesielska, M. (1997) Geneza utworów: Moški, Joski i Srule. Józki, Jaški i Franki. Teksty z czasopism (『モシキ、ヨスキ、スルレ』『ユスキ、ヤシキ、フランキ』および雑誌投稿論文といった作品の執筆起源について), 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 5* (ヤヌシュ・コルチャック全集 5 巻), Latona, 1997, 301-325.
- Demel, M. (1963) Z dziejów opieki nad dzieckiem i higieny wychowawczej w Warszawie na przełomie XIX i XX wieku (19-20 世紀転換期のワルシャワにおける子どもの保護と教育衛生学の歴史), *Przegląd Historyczno-Oświatowy*, 3, 301-331.
- Falkowska, M. (1989) *Kalendarz, życia, działalności i twórczości Janusza Korczaka* (ヤヌシュ・コルチャックの生涯、活動、作品の暦), Nasza Księgarnia.
- Hanecki, M. (1970) Środowisko lekarskie Warszawy 1864-1900 (1864-1900 年におけるワルシャワの医療界), 所収: *Studia warszawskie tom 6 — Warszawa XIX wieku 1795-1918 zeszyt 1*, PWN, 109-140.
- Korczak, J. (1898) Czy oni tacy źli? (彼らは悪いやつか?), *Czytelnia dla wszystkich*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 3-1* (ヤヌシュ・コルチャック全集 3 巻の 1), Latona, 1994, 10-11.
- Korczak, J. (1899) U Wujcia [1] (おじちゃんのところ), *Czytelnia dla wszystkich*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 3-1*, Latona, 1994, 120-122.
- Korczak, J. (1901) Przed zebraniem (会議の前に), *Czytelnia dla wszystkich*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 3-1*, Latona, 1994, 353-354.
- Korczak, J. (1902) Kolonie letnie-Kartka z dziejów filantropii warszawskiej (サマーキャンプワルシャワ慈善活動の歴史の 1 ページ), *Kolce*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 2-2* (ヤヌシュ・コルチャック全集 2 巻の 2), Latona, 1998, 115-116.
- Korczak, J. (1904a) Za rubla-6400 (6400 ルーブルに対して), *Głos*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 3-2* (ヤヌシュ・コルチャック全集 3 巻の 2), Latona, 1994, 22-25.
- Korczak, J. (1904b) Michałowka: Kolonia dla dzieci żydowskich [z notatek dozorczy] (ミハウフカーユダヤ系の子どものためのキャンプ [指導員のメモ帳から]), *Izraelita*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 5*, Latona, 1997, 237-285.
- Korczak, J. (1907) Moški, Joski i Srule: Wrażenia z kolonii letniej w Daniłowie (モシキ、ヨスキ、スルレーダニウオヴァでのサマーキャンプの感想), *Świat*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 5*, Latona, 1997, 286-294.
- Korczak, J. (1908) Józki, Jaški i Franki: Kolonia letnia w Wilhelmowce (ユスキ、ヤシキ、フランキーヴィルヘルムフカでのサマーキャンプ), *Świat*, 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 5*, Latona, 1997, 295-298.
- Korczak, J. (1910) *Moški, Joski i Srule* (モシキ、ヨスキ、スルレ), 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 5*, Latona, 1997, 7-95.
- Korczak, J. (1911) *Józki, Jaški i Franki* (ユスキ、ヤシキ、フランキ), 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 5*, Latona, 1997, 99-232.
- Korczak, J. (1918) *Jak kochać dziecko: Dziecko w rodzinie* (子どもをいかに愛するか—家庭の子ども編—), 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 7* (ヤヌシュ・コルチャック全集 7 巻), Latona, 1993, 7-136.
- Korczak, J. (1920) *Jak kochać dziecko: Kolonie letnie* (子どもをいかに愛するか—サマーキャンプ編—), 所収: *Janusz Korczak Dzieła tom 7*, Latona, 1993, 220-268.
- Łazarowicz, K. (1907) 25 lat działalności Kolonii Letnich w m. Warszawie (ワルシャワ市の 25 年にわたるサマーキャンプ活動), 所収: Ciesielska, M., 302.
- Łempicki, S. (1937) Encyklopedia wychowania tom 3 (教育百科事典 3 巻), Nasza Księgarnia, 554.
- Markiewicz, S. (1882) *Pierwsze letnie kolonje u nas: Sprawozdanie St. Markiewicza* (初のサマーキャンプ—S.マルキエヴィチの活動報告書), *Gazeta Handlowa*.

- Podgórska-Klawe, Z. (1970) Warszawskie Towarzystwo Dobroczynności i jego wydział sierot i ubogich dzieci 1814-1914 (1814-1914 年におけるワルシャワ慈善協会とその孤児・貧困部門), 所収: *Studia warszawskie tom 6 — Warszawa XIX wieku 1795-1918 zeszyt 1*, PWN, 141-184.
- Ziółkowska, T. (2004) Summer camps for children from Poznań between 1882 and 1939, *Studies in physical culture and Tourism*, 11(1). (<http://www.wbc.poznan.pl/dlibra/docmetadata?id=7273&>

from=publication)

- 塚本智宏 (2011) 「ヤヌシュ・コルチャックの子ども・教育思想の歴史的形成 (1890-1920 年代) — “子どもを人間として尊重する” 思想の形成を中心に —」『名寄市立大学紀要』 5、35-47。
- 平塚益徳監修 (1972) 『世界教育事典』 帝国地方行政学会。

※タイトルの日本語訳は筆者によるものである。

(北海道大学大学院教育学院・博士課程)